

第4章 特別演奏会その他

昭和27年～63年2月（1952～1988）

ここでは定期演奏会以外で注目すべき演奏会を、ジャンルを問わず年代順に取り上げる。

はじめに取り上げるのは音楽学部同声会および後援会主催による演奏会である。本書では、音楽学部発足以降、同声会主催の演奏会は原則として取り上げていない。しかし昭和20年代後半から30年代にかけて、合唱を含むオーケストラの演奏会が毎年行われており、これらはのちにオーケストラ定期演奏会で年末近くに行われるようになった「合唱・オーケストラの夕べ」のシリーズにつながっていく性格のものであるため、ここでプログラムを載せておく。

昭和34年の音楽教育創始80周年記念演奏会、昭和52年の東京芸術大学創立90周年記念演奏会がこれに続く。また昭和56年以来、毎年年末に「台東第九」が行われ、本学も協力して出演している。昭和56年の第1回のみ載せる。さらに昭和57年の「ガムラン特別演奏会」、昭和58年の「邦楽・ガムラン演奏会」、「浅草オペラの夕」、故小泉文夫教授追悼の「芸大ガムラン演奏会」、昭和59年の第2回「浅草オペラの夕」も取り上げる。

昭和60年には音楽学部と台東区教育委員会の共催で行った「吹奏楽の夕べ」、第3回「浅草オペラの夕」、そして昭和61年にはやはり音楽学部と台東区教育委員会の共催による「室内楽の夕べ」、第4回「浅草オペラの夕べ」がある。

創立100周年の昭和62年には、本学敷地から上野公園内に移築された旧東京音楽学校奏楽堂の開館を記念して「奏楽堂オペラの夕べーオルフェオとエウリディーチェ」が上演された。プログラムの内容は100周年記念演

奏と重複するので、第5章をご覧頂きたい。最後に昭和63年2月に行われた「ガムラン・雅楽の夕べ」を取り上げ、第4章のプログラムはここで締めくくられる。

昭和27年11月11日 東京芸術大学音楽学部演奏会

東京芸術大学音楽学部

演奏会

昭和27年11月11日（火）午後6時30分

日比谷公会堂

主催

東京芸術大学音楽学部同聲会

東京芸術大学音楽学部後援会

曲目

ヨハンネス ブラームス 作品45

ドイツ鎮魂曲

（聖書の言葉によれる独唱・合唱及び管弦楽）

Johannes Brahms op. 45
EIN DEUTSCHES REQUIEM
nach Worten der Heiligen Schriften
für Soli, Chor und Orchester.

演奏

独唱	多田光子 大賀典雄
合唱	東京芸術大学音楽学部 学生
管弦楽	東京芸術大学音楽学部管弦楽部
指揮	金子 登

管弦楽部員

1st Violin

兎東 龍夫
伊達 良
中村 桃子
川田 敦子
田中 栄一

深谷 南海子
大宮 翠
折山 俊也
竹内 茂
奥村 純子

Viola

河村 博子
竹内 久文
坂本 玉明
岩田 聖子
東儀 祐二
宮地 徹雄
鈴木 溶三

井上 武雄
河野 俊達
赤星 昭生
浅妻 文樹
伊藤 透
原田 昌彦
武笠 順子

2nd Violin

岩崎 吉三
岡田 富士子
長松 路子
田淵 稜子
宮崎 幸
二村 英比古

Violoncello

小沢 弘
広田 幸夫
野々山 昇祐
富沢 数馬
藤井 晃

菊川 曉
三木 敬之
野村 武二
福島 哲朗
伊東 毅

Double bass

今村 清一
丹羽 一郎
寺田 和久
江口 朝彦

Harp

島崎 多賀

Flute

川崎 優

Oboe

横田 美代子

Bass-Tuba

鈴木 清三

Kettle-Drums

梅原 美男
辻 正勝

新井 淑之
宮島 景三
中田 一次
三原 泰三

French-Horn

谷中 甚作
二俣 松四郎
福岡 安久

Trumpet

中山 富士雄

Trombone

島村 国彦

山本 正人

土橋 康宏

藤本 明

大石 清

今村 征男

東京芸術大学音楽学部同聲会

東京芸術大学音楽学部後援会

曲 目

ハイドン作・聖譚曲「四季」

(歌詞 ドイツ語)

シモン(小作人)……………バリトン

ハンネ(その娘)……………ソプラノ

ルカス(若き農夫)……………テノール

PROGRAMME

J. Haydn

Oratorium: Die Jahreszeiten

Simon: Ken-ichi Ishizu (Bariton)

Hanne: Mitsuko Maki (Soprano)

Lukas: Takanosuke Watanabe (Tenor)

Orchestra: Orchestra of the Tokio University of Arts

Chorus: Students of the Tokio University of Arts

Conductor: Akeo Watanabe

昭和29年12月1日 東京芸術大学音楽学部演奏会

東京芸術大学音楽学部

演奏会

昭和29年12月1日(水)午後6時

日比谷公会堂

主催

東京芸術大学音楽学部後援会

昭和28年11月26日 東京芸術大学音楽学部演奏会

東京芸術大学音楽学部

演奏会

昭和28年11月26日(木)午後6時30分

日比谷公会堂

主催

曲 目

バッハ作 彌 撒 曲 ロ 短 調

独 唱 第一ソプラノ 平原壽恵子 第二ソプラノ 岡部多喜子
 アルト 佐々木成子 テノール 柴田陸陸
 バス 小島 琢磨

合 唱 東京芸術大学音楽学部学生

管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽部

指 揮 渡 邊 曉 雄

PROGRAMME

J. S. BACH: DIE HOHE MESSE IN H-MOLL

Solo: I Soprano Sueko Hirahara II Soprano Takiko Okabe
 Alto Sadako Sasaki Tenor Mutsumu Shibata
 Bass Takuma Kojima

Chorus: Students of the Tokyo University of Arts

Orchestra: Orchestra of the Tokyo University of Arts

Conductor: Akeo Watanabe

昭和30年12月1日 東京芸術大学音楽学部演奏会

東京芸術大学 荘厳ミサ 音楽学部演奏会

CONCERT OF THE TOKYO UNIVERSITY OF ARTS
 DEC. 1, 1955. 6. 30 P. M. HIBIYA PUBLIC HALL

曲 目

ベートーヴェン 荘 厳 ミ サ ニ長調 (作品123)

独 唱 ソプラノ 伊 藤 京 子 アルト 中 村 浩 子
 テノール 五十嵐 喜 芳 バス 築 地 利 三 郎

合 唱 東京芸術大学音楽学部学生

管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽部

オルガン 秋 元 道 雄

指 揮 山 田 和 男

PROGRAMME

L. VAN BEETHOVEN: MISSA SOLEMNIS IN D-DUR (OP. 123)

Solo: Soprano, Kyoko Ito Alto, Hiroko Nakamura
 Tenor, Kiyoshi Igarashi Bass, Risaburo Tsukiji

Chorus: Students of The Tokyo University of Arts

Orchestra: Orchestra of The Tokyo University of Arts

Organ: Michio Akimoto

Conductor: Kazuo Yamada

昭和31年6月4日 東京芸術大学音楽学部演奏会

東京藝術大學音楽學部

演 奏 會

昭和31年6月4日 (月) 午後6時30分

日比谷公会堂

主 催

東京藝術大學音楽學部後援會

曲 目

ベートーヴェン: 交響曲 第4番 變ロ長調 (作品60)

モーツァルト: ピアノ協奏曲 ハ短調 (K. 491)

モーツァルト: 戴冠ミサ曲 ハ長調 (K. 317)

指 揮 山 田 和 男

ピアノ ハンス・カン
独唱 ソプラノ 松本弘子・アルト 長野羊奈子
テノール 石井昭彦・バス 梅原秀次郎
合唱指導 伊藤栄一
合唱 東京芸術大学音楽学部学生
管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽部

PROGRAMME

BEETHOVEN: SYMPHONIE NR. 4 B-DUR (Op. 60)
MOZART: KLAVIER-KONZERT C-MOLL (K. 491)
MOZART: KRÖNUNGSMESSE C-DUR (K. 317)

Conductor: Kazuo Yamada.

Piano: Hans Kann.

Vocal solo: Soprano, Hiroko Matsumoto. Alto, Yonako Nagano.
Tenor, Akihiko Ishii. Bass, Hidejiro Umehara.

Chorus: Students of The Tokyo University of Arts.

Orchestra: Orchestra of The Tokyo University of Arts.

昭和34年11月18日 音楽教育創始八十周年記念演奏会

音楽教育創始八十周年記念

邦楽演奏会

十一月十八日午後一時

日比谷公会堂

明治十二年十月文部省に音楽取調掛が設置され、わが国の音楽教育が創始せられてから八十年が経過しました。

遙かになった創始の往時を思い、続く長年の先人諸士の苦心の記録を思い、改めて現今の音楽の隆昌を思うとき、誰人も多少の感なきを得ないで

ありましょう。

ここに八十周年記念音楽会を催して、先人の功績に答え、祝意を表する次第であります。

東京芸術大学音楽学部長 田尾一一

曲 目

一、(観世流) 能

シテ 嶋沢俊一	大鼓 安福春雄	太鼓 観世元信
ワキ 野島 信	小鼓 三須錦吾	笛 藤田大五郎
羽衣	後見 沖武田宗久郎	地謡 竹福山丸
		中井階敬喜江
		宣道子子子
		波見浅木
		重重重
		満弘信夫

二、(観世流) 仕 舞

玉鬘	浅見重信	地謡 小川明宏
		沖武田北浪
		宗四郎
		雄

三、(宝生流) 仕 舞

葵上	佐野萌	地謡 前松当
		田本山
		忠忠興
		茂宏道

四、(宝生流) 舞囃子

藤戸	宝生九郎	大鼓 安福春雄	太鼓 観世元信
		小鼓 三須錦吾	笛 藤田大五郎
		地謡 前松当	
		田本山	
		忠忠興	
		茂宏道	

五、箏 曲

小 督 曲

山田 検校 作曲

唄 岸 辺 従 箏 野口ふみ子

323 第4章

合唱指導 伊藤 栄一

キャスト	Simon.	塩沢孝通
	Judas Maccabaeus.	板橋勝
	Eupolemus.	} 大川宗男
	Israelitish Messenger.	
	Israelitish Man	
	Israelitish Woman.	三觜晶子
	Israelitish Woman.	赤沢和子
	Israelitish Man.	下野昇
	Israelitish Messenger.	} 蝦名雅美
	Priest.	
	Israelitish Woman.	

オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管絃楽部
 合唱 東京芸術大学音楽学部学生
 児童合唱 東京放送児童合唱団(NHK)
 中野区立桃園第三小学校合唱団
 品川区立第三日野小学校合唱団

音楽教育創始八十周年記念会後記

行事と事業の記録(昭和三十四年十一月)

十一月十七日(火)

一、式典(十時—十一時)於 奏楽堂

式 辞	学部長	田 尾 一 一
祝 辞	学 長	上 野 直 昭
	全国音楽教育連合会長	
	同声会長	山 田 耕 笹
	後援会長	佐 藤 瑞 穂
	学生代表	蔵 田 裕 行

物故者慰霊奏楽

祝典奏楽 1 大学祝典序曲

ブラームス

2 マイスタージンガー序曲

ワーグナー

記念品贈呈 同声会長より堅型ピアノ拾台目録を以て贈呈

二、祝宴(十一時三十分—十三時)新館屋上

三、記念特別講演会(十三時三十分—十四時三十分)

講 師 田中耕太郎氏(於奏楽堂)

十一月十八日(水)

邦楽演奏会(十三時) 日比谷公会堂

洋楽演奏会(十八時) 同 右

プログラム前号掲載通り

十一月十九日(木)

学生の祝賀会 体育祭九時—十七時 於 台東体育館

音楽資料展示会 毎日 十時—十六時 於 美術学部陳列館

主 催 東京芸術大学音楽学部

協 賛 同 声 会, 父兄後援会

母校創立八十周年記念同声会

十一月十七日(火)

一、祝賀式(午後四時 於 上野精養軒)

式 辞

祝 辞 学 長 学 部 長

物故者慰霊 黙 禱

奏 楽 秋元道雄

功労者表彰 表彰の言葉 会 長

(一〇五名) 表彰状並記念品贈呈

二、総 会(右に引続き)

開会の言葉

議長選出 理事長 外山国彦氏当選

会務報告並に議事 記念事業の件

記念出版の件

三、祝 宴（午後五時三十分～一七時）

開会の言葉 外山理事長
祝 辞 祝 電
会 食
会員の意見発表
閉会の挨拶

参会々員百八十名、来賓二十名

以 上

【原資料縦組】

（『同声会報』第282号、昭和35年11月）

昭和52年10月28日～30日、11月1日 創立90周年記念演奏会

昭和52年 1977

A 10月28日 28. October

14:00 ガムラン演奏 14:00 *Gamelan Music*
15:00 邦 楽 15:00 *Japanese Music*

B 10月29日 29. October

学生による *by Students*
14:00 室内楽 14:00 *Chamber Music*
15:00 管 弦 楽 15:00 *Orchestral Music*

C 10月30日 30. October

14:00 教官による 14:00 *Concert by*
演奏会 *instructor*
於 第6ホール *at 6th Hall*

【11月1日の演奏会については、本書57頁を参照。】

東京芸術大学創立90周年 記念演奏会

序

明治20年、本学の前身である東京美術学校並びに東京音楽学校が創立されて以来、本年をもって90年の歳月を経ました。

その間、本学は、わが国における美術並びに音楽に関する教育・研究の機関として指導的地位を占めてきました。

これは、ひとえに本学の先輩各位の業績の賜であると存じます。

このたび創立90周年を記念して、各種展覧会のほか、記念演奏会を催すことになりました。

この演奏会は、本学音楽学部各科の教官・学生による日頃の研鑽の成果と新築した新館を大学関係者、先輩及びご父兄各位に披露するものであります。

この演奏会のため格別のご配慮を賜った関係各位及び企画運営の労をとられた各位に謝意を表します。

昭和52年9月

東京芸術大学長 福井直俊

A ガムラン演奏 *Gamelan Music* 楽理科・学生

1. KEBOGIRO GLENDHENG pl. 6

「クボギロ グレンデン」（来客を歓迎する音楽）

ペログ（音階名）ナム（調性の名）

2. 1) *pathetan sl. 9 wantah, bawa sekar Larabentro, dhawah Gd. GAMBIRSAWIT jangkep, minggah Ldr. GONJANG-GANJING bedaya suwuk.*

スレンドロ（音階）ソング（調）の長い音取（約1分半）

詞章「ロロベントロ」によるボラ（導入唱）によって

大曲「ガンビル・サウィ」全曲。（約15分）

第二楽章としてラドラン（形式名）「ゴンジャン ガンジン」

但し、ブドヨ様式で。（約2分）

2) *pathetan sl. 9 jugag, buka celuk*

ULER KAMBANG, kalajengaken Ldr. PAKUMPULAN

スレンドロ (音階) ソンゴ (調) の短い音取。(約30秒)

女声による導入で「ウルル・カンパン」(約5分)

ひきつづきラドラン (形式名)「パクンプラン」(約10分)

3) bubaran UDAN MAS pl. br

終曲「ウダン・マス」ペロググ (音階) パラン (調)

出 演

pesindèn ブシンデン(女声独唱)	竹之内有美子	bonang	ボナン	芹澤 薫
bawa	ボヲ(男声独唱)	大竹 知至		石田 式子
gérong	ゲロン(男声斉唱)	小川 一彦	slentem	スレンテム
	皆川 厚一	saron	サロン	村上圭子
	丸山 和範			天野 直子
rebab	ルバブ (胡弓)	萩原いづみ		橋本久美子
gendang	グンダン(太鼓)	森重行敏	ketuk	クトウ
			kenong	クノン
gender	グンデル	田邊史郎	kempul	クンプル
gambang	ガンパン(木琴)	細川三紀	gong	ゴング
				高桑賢治

* ガムラン鑑賞のために

田邊史郎

A 邦 楽 Japanese Music

邦楽科教官・学生

曲 目

一、能 楽 (仕舞)

花 筐

シテ 藤波重満

地謡 小川明宏
清水志和
津田 忠

二、能 楽 (舞囃子)

岩 船

シテ 佐野 萌 大鼓 安 福 建 雄
小鼓 幸 錦 吾太鼓 観 世 元 信
笛 藤 田 大 五 郎
地謡 武 孝 史
寺 良 雄
当 井 興 道
東 山 光 夫

三、長 唄

晴天の鶴

六世 伊 沢 修 二 作詞
杵屋三郎助 作曲
中能島欣一 箏手付唄 西 垣 勇 蔵
三味線 菊 岡 見 忍 亨
箏 中 能 島 慶 子
笛 若 川 林 英 次
小 鼓 古 川 吉 蔵

四、箏 曲

御山獅子

菊 岡 検 校 作曲
八重崎検校 箏手付箏 高 草 幹 子
三 弦 牧 瀬 理 子
尺 八 宮 城 数 江
山 口 康 江
郎

五、箏 曲

御代万歳

吉 丸 一 昌 作詞
今 井 慶 松 作曲箏 中 能 島 慶 子
三 弦 野 口 ふ み 子
増 淵 任 一 朗
木 原 司 都 子
亀 山 香 野

[原資料縦組]

B 室内楽 Chamber Music

学 生

F. Mendelssohn Klavier Trio, d moll op. 49

メンデルスゾーン ピアノ三重奏曲 ニ短調 作品49

Pf 迫 昭 嘉
VI 富 永 暢 Vc 宮 沢 政 司

A. Reicha Quintett für Flöte, Oboe, Klarinette,
Horn und Fagott D dur op. 91—3
ライヒャ 木管五重奏曲 ニ長調 作品91—3
Fl 大 住 修 二 Hr 脇 本 周 治
Ob 松 本 敦 史 Fg 大 澤 昌 生
Cl 水 野 克 彦

L. v. Beethoven Streichquartett, F dur op. 18—1
ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 ヘ長調 作品18—1
1st VI 奥 田 雅 代 Vla 市 川 か お る
2nd VI 林 京 子 Vc 斉 藤 章 一

Ⅲ 管弦楽 Orchestre 学 生
L. v. Beethoven Overture “Leonore” No. 3 op. 72 a
ベートーヴェン 序曲「レオノーレ」第3番 作品72 a
指揮 遠 藤 雅 古
東京芸術大学音楽学部2年学生オーケストラ

C. Saint-Saëns Symphonie, No. 3 c moll op. 78
サン・サーンス 交響曲 第3番 ハ短調 作品78
指揮 金 子 登
東京芸術大学音楽学部3, 4年学生オーケストラ

Ⅳ 教官による演奏 Concert by Instructor

ピアノ 安 川 加 寿 子
池内友次郎 ソナチネ (1954年)
ショパン エテュード 作品25 No. 1 変イ長調
No. 2 [ヘ短調]
No. 3 [ヘ長調]
バラード 作品23 ト 短 調

Klavier Kazuko Yasukawa
Tomojiro Ikenouchi Sonatine (1954)
Chopin Etude op. 25 No. 1 As dur
No. 2 f moll
No. 3 F dur
Ballade op. 23 g moll

ヴァイオリン 海 野 義 雄
ピアノ 小 林 仁
モーツァルト ソナタ K. V. 304 ホ 短 調
ヒンデミット ソナタ ホ 調

Violine Yoshio Unno
Klavier Hitoshi Kobayashi
Mozart Sonata K. V. 304 e moll
Hindemith Sonata E
作 品 南 弘 明 「星々のうたった嘆きの歌」
——電子音による作品——

composition Komei Minami
“Klagelied, das Sterne Sängen”
ソプラノ 瀬 山 詠 子
末吉保雄「中原中也の三つの詩」
フルート 小泉 浩 チェムパロ 末吉保雄
コントラバス 江口朝彦 パーカッション 岡田知之

soprano Eiko Seyama
Yasuo Sueyoshi “Three Songs of Chuya”
ティムパニー 有 賀 誠 門
池野 成「ティムパニータ」(1977年)
フルート 中川昌三 南 浩之 沖野信雄
ホルン 大橋秀丸 野武重忠 テューバ 杉山 淳
村松正春 田中康之

パーカッション 中谷 考哉 前田 均 近藤 健一
 山口多嘉子 河合 尚市
 timpani Makoto Aruga
 Sei Ikeno “Timpanata” (1977)

* 星々のうたった嘆きの歌

南 弘明

東京藝術大学創立九十周年記念演奏会報告

演奏委員長 中山 富士雄

昨年、昭和五十二年は本大学の創立九十周年にあたるので、美術、音楽両学部においてそれぞれこれを記念する各種の催しが行われた。

音楽学部は音楽教育資料展、楽器展のほかに新しく完成した練習用ホールでの披露の意味も若干兼ね、新ホールで各科の協力を得て三日間にわたる演奏会や、東京文化会館大ホールにおいて一般の方々に向けての独唱、合唱、管弦楽による演奏会を開催して九十周年を記念した。以下それらの記念演奏会について簡単にご報告をいたします。

第一日目の十月廿八日の午後の前半は楽理科の学生諸君によるガムラン音楽の記念演奏があった。中部ジャワに古くから伝わる打楽器を中心としたこの音楽の演奏は楽理科の民族音楽研究の一つで、当日使用された一群の楽器は数年前に大学が購入した中部ジャワの古都スラカルタの王宮に伝わる約一九〇年前に製造された由緒あるもので、演奏は男女各々一人ずつの独唱と三人の男声斉唱及び十四人の器楽奏者によってなされた。

同日後半は邦楽科の教官、学生諸氏による演奏で、能楽、長唄、箏曲などは九十周年にふさわしい曲目を選定し、教官を中心に演奏された。なかでも長唄の「晴天の鶴」は明治廿一年東京音楽学校が設立された初代校長に就任された伊沢修二先生の作詞に杵屋三郎助氏が作曲されたもので、記念演奏として大変有意義であった。

第二日目の十月廿九日、午後の前半は学生諸君による室内楽、後半は同じく学生オーケストラが出演した。

室内楽は三組で曲目は、メンデルスゾーンの「ピアノ三重奏」、ライヒャの「木管五重奏」、ベートーヴェンの「弦楽五重奏」が演奏された。これらのアンサンブルのグループは数十組のグループのなかからオーディションによって選出されたものである。

後半は二年の学生オーケストラがベートーヴェンの序曲「レオノーレ」第三番、三、四年がサンサーンスの交響曲第三番を演奏し、若さ溢れる演奏を聴かせた。

第三日目の十月卅日は教官による演奏で出演者はピアノ、弦、作曲、声楽、管打の各科がそれぞれ協議の結果決定された。

ピアノは安川加寿子、ヴァイオリン・ソナタは海野義雄と小林仁、作曲は電子音楽の南弘明、声楽は瀬山詠子、ティンパニーは有賀誠門の諸教官により古典から現代に至る幅広い変化に富んだプログラムとなった。

この新ホールは元来演奏会場というより練習所として設計されたもので聴衆を収容するスペースは狭く、椅子も取付けでなく、約五百人の収容人員を確保するため、大編成のオーケストラは可成奥の方へつめて位置したり、音響効果も初めての使用ということで聴衆の入った場合の予測ができず多少の不安はあったが、特に大きなマイナスはなく無事に終了した。しかし、今後の調査と研究の必要なことはいうまでもない。

記念演奏会第四日目は十一月一日、東京文化会館で午後六時卅分から開かれた。

曲目はハイドンの「天地創造」で、独唱者は本学講師のバスの高橋大海氏、その他はオーディションによって声楽科学生のうちから選出された。合唱は一年から三年までの声楽科の学生約百八十名、オーケストラは大学の管弦楽、指揮は新しくオペラ科教官に就任した大町陽一郎氏であった。

当夜の入場者は椅子席は大体満員で、プログラムは全部売切れという盛況となった。NHKのテレビとFMはこれを録画録音、一時間番組として十一月廿三日に放送された。

以上が九十周年記念演奏会の概要である。

入場者については新ホールの三日間、殆ど予定した人員に近い聴衆を迎

えることができたのは主催者側として嬉しいことであったが特に同声会支部長会議もあり、多くの先輩のご来場や、また卅日の演奏会に明治四十二年ピアノ科卒業の香川鈴さん（八十八歳）も見えられ、懇親会にも出席されたことは九十周年のもう一面の歴史の重みを感じられ、一同感を一層深めた。

〔原資料縦組〕

（『同声会会報』第315号，昭和53年1月，4～5頁）

昭和56年12月23日 台東第九

1981年12月23日（水） 6：00開場 6：30開演

台東区立浅草公会堂

主催／第9番「公演」実行委員会

共催／台東第九を歌う会・台東区教育委員会 協力／東京芸術大学

プログラム

ベートーヴェン

交響曲第九番 ニ短調 作品125「合唱付」

An die Freude

Schlußchor aus der Symphonie Nr. 9

指揮……………大町陽一郎

管弦楽……………東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

合唱……………台東第九を歌う会

独唱……………東京芸術大学大学院音楽研究科生

ソプラノ 岩井里香

アルト 阪口直子

テノール 武田正雄

バス 戸山俊樹

合唱指導……………渡辺三郎

練習ピアニスト……………末永みどり

ごあいさつ

*台東区長 内山栄一

*台東区議会議長 佐下橋源重郎

東京芸術大学音楽学部長 浜野政雄

このたび、台東区の主催によるベートーベンの第9交響曲の演奏会に、東京芸術大学音楽学部はそのお手伝いをするようになりました。芸大は東京上野に生まれ育ってほぼ100年近くにもなりますが、こんな形で地元台東区に協力出演することができることはたいへん嬉しいことです。

ベートーベンの第9といえば、私も若いころ一度は歌ってみたいと憧れた名曲です。今日、台東区民の皆さんの合唱でそれが実現されることは素晴らしいことですし、このこと自体台東区の音楽文化レベルの高さを示すものでしょう。今回の演奏会が盛会のうちに行なわれますようお願いのとともに、区内の一員として音楽学部は今後ともご協力させていただきたいと思っております。

*台東区教育委員会

「公演を迎えて」

実行委員会委員長 濱田稔

今年も「第九」の季節を迎え各地で合唱の声が流れています。ただ例年と異るのは、待望の区民による第九の歌声がいよいよ浅草公会堂から響きわたることです。

この5月「下町で第九」をキャッチフレーズに区内全域から会員がつどい、6月4日渡辺三郎先生をお迎えして「台東第九を歌う会」が誕生し、以来毎週木曜日、熱心な練習が続けられました。

10月30日には、台東第九を歌う会、東京芸術大学、台東区教育委員会の三者による公演のための実行委員会が発足し着々と準備が進められてまいりました。本日その成果を地元東京芸術大学のご協力のもとに大町陽一郎先生の指揮、音楽学部管弦楽研究部及び大学院生の独唱により発表される

こととなりました。まことにご同慶に堪えません。

こんな素晴らしい編成で公演される第九は他に例をみないと思います。皆様の温かいご支援をお願いいたします。

* 「この感動のひろがりを」 台東第九を歌う会 会長 刀 根 國 武
* 「広報紙・第九通信から」 (I & A)

昭和57年1月12日 ガムラン特別演奏会

東京芸術大学音楽学部

ガムラン特別演奏会

1982年1月12日(火) 午後6時30分開演

東京文化会館小ホール

* ごあいさつ

山本正男(東京芸術大学学長)
浜野政雄(東京芸術大学音楽学部長)
サプトノ(東京芸術大学外国人教師)

小泉文夫(東京芸術大学教授)

今から25年ほど前になりますが、東京の朝日講堂で、インドネシア芸能団の公演がありました。静かで幻想的なジャワのガムランに対して、烈しく華麗なバリ島のケチャやガムランの響き。生涯忘れることの出来ない大きな衝撃をうけました。

その直後に私はインドに留学し、そこで UCLA 出身の R・ブラウン氏(現在、サンディエゴ大教授)に逢い、彼の口から M・フッド教授が UCLA でジャワのガムランを実技教科として始めたことを知りました。

インドネシアの伝統音楽が世界にその価値を認められたのは、第1回のパリの万国博といわれますから、日本の明治時代になりますが、ガムランの研究はオランダ植民地時代に J・クンスト博士によってなされ、彼の研究は今でも大きな評価を得ています。しかし、このガムランが、インドネ

シアの国外で、大学教育の体系に組込まれ、大きな期待とともに熱心に研究、実習されたのは、この M・フッド教授の努力が最初だった と思います。

実は、戦前にも宝塚少女歌劇の創立者で商工大臣だった小林一三氏が、ソロの王宮から一組のガムラン楽器の寄贈を受け、東宝映画の伴奏音楽や効果音として使用されたり、一般に展覧されたこともありましたが、残念ながら日本では、この楽器を使って、ガムラン音楽を研究、実習しようというところまでは行きませんでした。ただ戦時中にインドネシアに駐留した日本軍の兵士や軍属や報道班員の中には、ガムラン音楽の魅力にとりつかれ、その後今日まで、その美しさを忘れ得ない人々が案外大勢います。

ところで私は、1967~68年に、前述の R・ブラウン教授の招きで、米国コネチカット州のウェスレヤン大学で教えることになりましたが、その大学で初めてガムランの授業に参加しました。先生はジョグジャカルタの B・スハルトという若い舞踊家で、音楽も大変上手な人でした。この時の感激は今も忘れられません。学生たちに混って、比較的やさしい楽器を受けもち、たのしみながら、次第にガムランに深入りしていく自分が、今もなかなかしく憶い出されます。

1970年の大阪における万国博で、インドネシア芸能団をふくむ『アジアの祭』を演出することになり、再びガムランに接する機会がありました。そこで翌1971年にジョグジャカルタを訪れ、B・スハルト氏の父、サストロプストロ氏から直接手ほどきを受けたり、各地のガムラングループの録音を行ったり、またスラバヤでジョグジャカルタ製のスレンドロ音階の小さなセットを購入したりしました。これは私用のもので、その後加えた楽器と合わせて、現在でもわが家の一室を占領しています。この年、ソロ(スラカルタ)でチョコロスカルノという不動産業者で百貨店などを経営している人が、かつて王宮に所属していたという古い見事なガムランを持っていることを知りました。すでに180年も経た時代のもので、インドネシアの法律では、国外持出しは禁じられているものです。

しかし、東京芸術大学は日本の国立大学ですから、日本の文部省からイ

インドネシア政府に交渉すれば、特別の許可が得られるかも知れないと思い、早速当時の音楽学部長の池内友次郎先生に手紙を書き、芸大で購入してくれるよう頼みました。池内先生は予算をあれこれ検討して下さいましたが、本年度はどうしても無理であるが、来年なら可能性はあるという御返事をくれました。

その1971年に、私は再び米国のウェスレヤン大学に客員教授として招かれ、そこでまたガムラン教室に参加しました。今度の先生は、ブラヴォトサプトロというソロの音楽家でした。

1972年に再びインドネシアを訪れ、未だチョクロスカルノ氏所有のガムランがホテルの倉庫に眠っているのを見とどけてから、その時にはすでに帰国しておられたブラヴォトサプトロ先生に楽器を見ていただきました。

「750万ルピアという云い値は、高すぎるから、私が品物を見て半値ぐらゐに値切ってやる」と先生は云って下さいました。日本人の感覚からすると、スレンドロと2種のペロググ音階を備えた完全なガムランのセットで、しかも由緒ある王宮に属していた時代ものの楽器が、僅か邦貨にして700万円というのは安過ぎる価格ですが、インドネシアの人びとにすれば、それは普通のセットの優に倍以上の云い値であったわけです。

しかし、古いホテルの空き部屋をあけて、その静かに眠る楽器群を一つ一つ見てまわり、大ゴングをそっと鳴らして見た時、もう先生は黙ってしまいました。さき程の約束はどうなったのか、と聞きますと、ただ一言「永い間ガムランをやって来て、いろいろな楽器を見たが、王宮の外で、こんなすばらしいガムランを見たことがない。」と云われました。

池内学部長には、そのことをすぐに手紙で書き、購入の方法や特別許可を求める方策について相談しましたが、やはり予算はすぐには下りず、手続きもなかなか面倒のようでした。

1973年、ついに日本楽器のジャカルタ支店に仲介をお願いして、手続きや輸送にかかわる一切をやってもらうことにしました。そして、とうとう高島台団地の或る倉庫に楽器が到着したときは、夢ではないかという気持でした。

楽器が来るまで、毎週水曜日の夜、私の家でガムランの練習をしていました。私の知識や能力は限られていましたが、幸い現在大学院に在学中の田村史子さんが前述のR・ブラウン教授のもとに留学したり、米国からガムラン専攻の学生が来て援けてくれたりで、何とかガムランの実習を続けて行くことが出来ました。

1973年にマニラでユネスコの国際音楽会議があり、そこで前述の、米国で初めてガムランの実習を始めたM・フッド教授に逢いました。実は、私に一つの悩みがありました。芸大にやっと待望のガムランが到着したのですが、肝心の大ゴングの音が、どうも本来の響きを持っていないような気がしました。ソロのホテルの空室に置いてあった時の、あの深い、神秘的な余韻が少し足りないような気がしたのです。

「インドネシアと日本では、気候や環境が違うから、同じ音にならない、という事は大いにあり得る」といって、フッド教授は少し考え込んでいましたが、やがて、「ひょっとすると、ガムラン教室の部屋が細長い形で、しかも、大ゴングが縦に釣ってあるのではないか」といわれました。

池内学部長が、第二会議室をガムラン教室に転用することを許して下さいたのですが、その部屋はフッド教授の云うように、細長く、しかも大ゴングは縦に釣ってあったのです。

「大ゴングの音は小さくても、その振動数は低いので、部屋の横巾の長さでは十分ではない。横向きに置かえれば、部屋の縦の長さがゴングの振動にマッチするようになる」と教えてくれました。

東京に帰って早速、学生たちと一緒に大ゴングの位置をかえて見ました。果せるかな、フッド教授の云うように、大ゴングはその本来の深い神秘的響きをとりもどしたのです。

1974年に第1ホールで、初めて披露の演奏会を行いました。福井学長や石桁学部長も出席され、晴れがましい一日でした。それからは、民族音楽学演習の一部という形で、細々と実習が続けられましたが、本格的にガムラン演習という形で、授業が拡充したのは、インドネシアから客員外人教師としてサプトノ先生がいらしてからです。これには現在の浜野学部長の

絶大な御尽力があって実現したのです。

この丸2年の間に、芸大のガムランは飛躍的な展開と進歩を見せ、サプトノ先生の技能と人柄、またサプトノ先生やガムラン音楽に深い親しみと尊敬を抱く学生諸君の努力によって、今回その成果を初めて学内外に見て頂くことになりました。

この特別コンサートの実現に努力された浜野学部長、演奏委員会、井上庶務係長、またポスターやプログラムの作成に尽力された学生諸君に心から感謝したいと思います。

演 目

1. 《儀典用楽曲》 グンデング・ボナング：トゥコング
(ペロッグ パラング)
 2. 《宮廷舞踊用楽曲》 テジョノト〜プラヨン (ペロッグ リモ)
 3. 《演奏会用楽曲》 パンコル〜ロジョスウオロ
(スレンドロ ソンゴ)
 4. 《舞踊》 メナ・コンチャル 踊り：田村史子
(伴奏曲) アスモロドノ〜サンパ (スレンドロ マニユロ)
- ～休 憩～
5. 《ララス・マディオ》 導入唱ウエガング・スランジャリ〜ミジエル (ペロッグ ヌム)
 6. 《影絵人形芝居》 ダラング：皆川厚一
 - a) 序曲：スリ・カトン〜ソクモ・イラング〜アヤ・アヤ・アン〜スルプガン〜パララン〜サンパ (スレンドロ マニユロ)
 - b) 「プラング・クンパング」：スボカストウオ〜アヤ・アヤ・アン〜スルプガン、スルプガン〜サンパほか(注)。
 7. 《遊び歌》

a) ロンド・マラム (スレンドロ ソンゴ)

b) ソペル・ベチャ (ペロッグ ヌム)

c) シプレ・シプレ クトゥブ

〜《終曲》アヤ・アヤ・アン パムンカス
(スレンドロ マニユロ)

注：6bでは芝居の進行に応じて随時曲目が追加されるかもしれません。

- | | |
|------------------|--------------|
| * 演目解説 | 田村史子 |
| * ジャワのカタカナ表記について | 田邊史郎 |
| * ガムラン音楽における詩 | 田村史子 |
| * ガムラン音楽総論 | サプトノ (田邊史郎訳) |
| * 楽器の紹介 | ランバンサリ編 |
| * ジャワのワヤング | 芹澤 薫 |
| * 芸大ガムランの沿革 | 森重行敏 |

ガムラン特別演奏会 メンバー

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ・小泉 文夫 | 大倉 文雄 | ・牧野 宏美 | ・松原 絹枝 |
| ・サプトノ | 木村 直子 | ・石内 貴子 | ・松本美千代 |
| 〈大学院生〉 | 林 美穂子 | ・植村 幸生 | ・丸山 真樹 |
| ・田村 史子 | 矢向 正人 | ・大宅 緒 | ・安原 雅之 |
| ・田邊 史郎 | ・秋山 智子 | ・岡本 悦子 | 〈卒業生〉 |
| ・石田 式子 | ・木村 佳代 | ・風間 純子 | ・佐藤まり子 |
| ・芹澤 薫 | ・坂尾 康子 | ・鹿野はるな | 竹之内有美子 |
| ・宮丸 直子 | ・笹野 浩樹 | ・下道 郁子 | 森重 行敏 |
| 〈学部生〉 | ・白井真由美 | ・遠山菜穂美 | 村上 圭子 |
| ・皆川 厚一 | ・波多 恵 | ・福岡 正太 | ・田村真理子 |
| ・野田 宏人 | ・山田 敦子 | ・細川 晶子 | |
| ・高桑 賢治 | ・鴻巣 香 | ・堀井 広子 | ・中村 裕二 |
| 小川 和香 | ・土田 若子 | ・牧野英一郎 | 平井 力 |

森重真由美
(・は本日の出演者)

実行委員	協力
田村 史子	村上 圭子
石田 式子	皆川 厚一
芹澤 薫	野田 宏人
田邊 史郎	坂尾 康子

ガムラングループ「ランバンサリ」
東京音楽大学ガムラン同好会

響けガムラン

インドネシアの伝統音楽 芸大グループが演奏会

インドネシアの伝統的な民族音楽である「ガムラン」の特別演奏会が、東京芸大と同大学院のグループによって、十二日午後六時半から、東京文化会館小ホールで催される。芸大生によって、アジアの民族音楽が系統的に紹介される珍しい試みである。

芸大では四十九年から「民族音楽学演習」という名目で、週一回ガムランの実習が行われていたが、五十四年四月、ジャワのスラカルタ市からサプトノ氏を外国人教師として招いてから、手探り状態を脱して、本格的な演奏活動ができるようになった。演奏会当日は、サプトノ氏と小泉文夫教授がリーダーとなり、学生たち計二十五人で九曲を演奏するほか、影絵芝居も披露する。

「ガムラン」とはインドネシア語で「打つ」という意味の「ガムル」から出ており、もっぱら打楽器を主とする合奏形態を指すことば。青銅製の出ベソのようなボナングやクノングと、マリimbaに似たサロンやグンデルなど二系統の打楽器に、リード役の太鼓とメロディーを奏する胡弓(こきゅう)のようなルバップ、それに笛などが加わって、一つのオーケストラになっている。

音階は五音なので日本人の耳になじみ深く、五音でつくられた比較的短い定旋律を中心に、各楽器がいろんな旋律で、その間を埋めてゆく。もち

ろん規制はあるが、即興性に富み、洋楽器のような指揮者はなくて、太鼓を打つリーダーのリズムにすばやく反応しながら、早くなったり遅くなったりしながら演奏が続く。

通称「ガムラン部屋」といわれる音楽学部の実験室では、サプトノ氏を中心に、年末から猛練習がつづいていた。グループの話では「この楽器に出会ったばかりに、人生に予期せぬ道が開けた」と思う人が大部分という。

[原資料綴組]

(『朝日新聞』昭和57年1月8日)

昭和58年1月24日 邦楽・ガムラン演奏会

邦楽・ガムラン演奏会

1983年1月24日(月)

新宿文化センター

主催●東京芸術大学音楽学部

第1部 ガムラン

〈曲 目〉

1. Ladrang WILUJENG *bedayan pélog barang*
「ウィルジュング」(ペログ バラング)
2. Gending GAMBIRSAWIT kalajengaken Ladrang GONJANG
GANJING *sléndro sanga*
「ガンベルサウエツ」～「ゴンジャング・ガンジェング」
(スレンドロ ソンゴ)
3. Beksan PRIYAGAMA 舞踊「プリヤガマ」
Suluk MIJIL SUTEKI kasambet Ketawang MIJIL SUKENG TYAS kalajengaken Ayak-ayakan LELASMARA,
Ladrang LAMBANGSIH, Lancaran WALIPURNA *pélog lima~barang*

「ミジェル・ステキ」～「ミジェル・スケング・ティヤス」～

「アヤ・アヤ・アン レラスモロ」～「ランバンセ」～「ワリポ
ルナ」(ペロッグ リモ～バラング)

4. Jineman ULER KAMBANG *sléndro sanga* suwuk Dolanan
WIRA WIRI *pélog nem*

「ウルル・カンバン」(スレンドロ ソンゴ)～「ウィラ・ウィ
リ」(ペロッグ ヌム)

5. Beksan DARMASARI 舞踊「ダルマサリ」

Ladrang PLAYON kalajengaken Lancaran TROPONGAN,
Lancaran WELASAN, Lancaran SERAYU, GANGSA-
RAN *pélog lima*

「プラヨン」～「トロポンガン」～「ウェラサン」～「スラユ」
～「ガンサラン」(ペロッグ リモ)

terus Penutup Lancaran JAMU-JAMU *pélog nem*

終曲「ジャム・ジャム」(ペロッグ・ヌム)

* 芸大とガムラン

サブトノ

* 曲目解説

* ガムランのうた

ガムラン演奏メンバー

小泉文夫 (Rebab)

サブトノ (Kenḍang)

石田式子 (Kenḍang)

木村佳代 (Gendèr barung)

坂尾康子 (Bonang barung)

白井真由美 (Saron barung)

山田敦子 (Sinḍèn)

鴻巣 香 (Saron panerus)

牧野宏美 (Saron ḍemung)

植村幸生 (Gambang)

岡本悦子 (Bonang panerus)

風間純子 (Sinḍèn)

福岡正太 (Beksa <踊り>)

松原絹枝 (Beksa)

井上恵理 (Beksa)

大高智子 (Kempul)

佐々木真理子 (Gong ageng)

佐藤里美 (Beksa)

島賀真紀子 (Beksa)

橋本佳代子 (Kenong)

福沢達郎 (Gendèr panerus)

佐藤まり子 (Sinḍèn)

田村史子 (Beksa)

田村真理子 (Slentem)

中村圭子 (Sinḍèn)

野田宏人 (Suling, Gèrong)

皆川厚一 (Kenḍang, Gèrong)

森重行敏 (舞台監督)

金子みゆき (Beksa)

中村裕二 (Rebab)

星野起美 (Ketuk, Kempyang)

森重真由美 (Saron barung)

<協力>

芹澤 薫 ガムラングループ
「ランバンサリ」

宮丸直子

木村直子 「ガムラン演奏」
授業履習者

小川和香

林 美穂子 民族音楽
ゼミナール

矢向正人

笹野浩樹 東京音楽大学
ガムラン研究会

波多 恵

木村健一 草野妙子

第2部 邦 楽

尺八本曲

わか ば
若 葉——都山流

中尾都山 作曲

第一尺八

山 本 泰 正
(邦山)

第二尺八

岩 田 恭 彦

柴 田 潔

河 合 譲 二

常磐津

えびすもうでこころのつりばり つり おんな
戎 詣 志 鈞 針 (鈞女)

河竹黙阿弥 作

浄瑠璃

福 田 和 夫
(常磐津清勢太夫)

三味線

鈴 木 英 二
(常磐津文字兵衛)

常磐津清若太夫

常磐津 文字蔵

吉 田 美奈子

多 胡 宏 美

鈴 木 雅 雄

上 調 子

鈴 木 淳 雄

尺八本曲

こ ぐろ せい ぼ
虚 空 鈴 慕——琴古流

黒沢琴古 編曲

本 手 山 口 五 郎 替 手 横 田 孝 志
竹 村 文 宏 大 矢 淳 治
鳥 居 誠 德 丸 裕 二

合奏研究

大 髭 始 末——初演

西田豊子 作詞

伊藤松博 作曲

			指 揮 伊 藤 松 博
唄 男 声	杉 田 勉	I 箏	大久保 智 子
唄 女 声 I	辻 野 理 佳		中 山 いずみ
唄 女 声 II	菊 田 和 子		樋 口 美佐子
	志 村 かしわ		大 間 道 敬
	圓 井 英 子	II 箏	稲 地 理 子
	山 崎 秀 子		黒 本 圭 子
十七弦	原 千恵子		井 上 明 子
	杉 崎 正 美		中 原 真由美
	藤 井 泰 和	III 箏	宮 本 直 美
尺八 I	岩 田 恭 彦		小 林 千佳子
	河 合 讓 二		秋 山 恵 子
II	大 矢 淳 治		衣 笠 一 代
	徳 丸 裕 二	太鼓	小 竹 弘 一
三味線 I	細 井 絵 美	大鼓	阿 部 寿美子
II	山 田 伊 吹	小鼓	前 島 美 紀
	仁 科 廣 美	笛	内 田 徹
III	清 川 雅 子		
	山 田 朋 子		
IV	鈴 木 淳 雄		
	多 胡 宏 美		
	相 原 利 香		

解 説

狂言「髭櫓」をもとに改作したものです。

狂言「髭櫓」は、夫の大髭をめぐって夫婦が争い、女房仲間の力によって妻が勝つ、しかも女房連合軍がエイエイオー！と勝どきを上げて曲を終るという、どこか「女の平和」を思わせるようなゆかいな物語りです。

改作にあたっては、何よりも原作をそこねないように、そして現代にも通じる風刺を判りやすく、したがって音楽も、大らかに、明快にと心がけました。

箏 曲

松 竹 梅

三津橋勾当 作曲

一 箏	増 渕 任一朗	三 絃	砂 川 康 江 (上木)
	中 香 野 (亀山 香能)		砂 崎 知 子
	鈴 木 厚 (厚一)		矢 崎 明 子
唄	岸 辺 従 (藤井 千代賀)		新 宮 順 子
	木 原 司都子 (山勢)	胡 弓	吉 沢 昌 江 中 井 猛

演奏会に意欲的試み ガムランと邦楽を柱に

東京芸大の特別演奏会が、今年はインドネシアの民族音楽であるガムランと、邦楽を二本の柱として催されることになった。

二十四日午後六時から東京の新宿文化センターで。まず昨年一月に初演奏会を東京文化会館で催して好評だったガムランの分野で、楽曲を三つ、舞踊小品を二つ。二つの舞踊小品は、四年前から芸大へ外国人教師として、ジャワのスラカルタ市から招かれたサプトノ氏の創作。同氏の指揮によって、芸大音楽学部の楽理科、作曲科を中心に、ガムランへの情熱がもえあがり「ランパンサリ」という研究グループが生まれた。

「プリヤガマ」という作品は愛する男女の出会いを、魔法の変化によ

て劇的に表現したもの。フィナーレを飾る「ダルマサリ」は、サプトノ氏が滞日四年の間に感じた日本人の生活と心を抽象的にえがいた作品。とくに第二次大戦を境とする変化に重点を置いている。

また演舞楽曲の「ウィラ・ウィリ」はインドネシアの現代作曲家による新作で、ガムランにサンバのリズムを採り入れた意欲的なもの。全体を通じて伝統的なガムランの伝統を大切にしながらも、国際交流や新旧世代の交代の動きが、具体的に味わえるプログラムになっている。

邦楽の部では、指揮棒による「大髭始末」の合奏研究や、箏曲の生田流、山田流合同演奏などが企画されている。

音楽学部が一番奥まった校舎の二階にある通称「ガムラン部屋」では、連日午後六時から二時間の猛練習。サプトノ氏と並んで指導している小泉文夫教授は「この学校は創立以来、西欧一辺倒だったのが、やっと民族音楽の灯が輝き始めたので喜ばしい。ファンもここ数年で急にふえ、心強い限りです。」と張り切っていた。

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』昭和58年1月20日)

昭和58年7月15日 第1回浅草オペラの夕べ

浅草オペラの夕

1983年7月15日(金)

開場=6:00PM 開演=6:30PM

台東区立浅草公会堂ホール

主催=台東区教育委員会

協力=東京芸術大学

ごあいさつ

東京都台東区長 内山 榮一

奏楽堂の問題を通じ、芸大と台東区の手を繋いでいる。

芸大からオペラ復活はどうだろうと台東区に申し込まれた。台東区は諸

手を挙げて賛成、そして、今日になった。

黛先生は、「区長、七月十五日は日程を空けてあるよ」、ありがたいことです。

田谷先生には三拝九拝して、新婚の奥さんのご協力でご出演してもらった。ギネスブックものだ。

オペラとフレンチカンカン、変な組合せだが、エールフランス航空のご好意です。

素人の企画です、ご理解を。

お風呂に入ってさっぱりしたゆかた姿でオペラを鑑賞する、そんな気分はいかがですか。オペラは、芸大の音楽学部長渡邊先生以下素晴らしいスタッフのご指導ご出演で、感銘深いオペラになるでしょう。

ポスターもすばらしかったでしょう。有名な福田繁雄先生の労作です。

毎年暮れになると、芸大のご協力で第九がやってくる。

毎年お盆になるとオペラがやってくる。

そんな風にしたいと思ってます。

東京芸術大学音楽学部長 渡邊 高之助

毎年暮の「第九」共演でお馴染みになった台東区の皆様に今回は、我が国オペラ発祥の地でもある浅草に区長初め区民の皆様のご協力を得て「浅草オペラの夕」を開けることは、心から慶びに堪えません。

今回はオペラの大先輩である田谷力三先生の御協力、御出演を得て更に「華」をそえることになりました。

お蔭様をもちまして、区民の皆様にも懐かしい名曲の数々が織込まれ必ずや意義のある夕となる事を確信致します。これを機会に「浅草オペラ」の復活を計り、関係各位の御理解、御協力を得て、毎年でも此のオペラの夕を上演出来ればと願う次第です。

台東区教育委員会

今回、地元東京芸術大学のご協力を得まして、ここ浅草の地でオペラを

上演する運びとなりました。ところで、台東区とオペラとのかかわりは歴史的に大変興味あるつながりをもってあります。

日本におけるオペラ公演は、明治36年に東京芸術大学の前身、東京音楽学校の奏楽堂で一般に公開上演されたのに始まるといわれております。その後、帝劇等で上演されますが興行的に成りたらず、やがて大正期に入って浅草で上演され、庶民芸術オペラとして開花し、浅草オペラの全盛時代を迎えることとなります。いわば、このように台東区は我が国のオペラにとって、その発祥の地であり、庶民芸術オペラを育てあげたところと申せましょう。

このようなゆかりの地で、当時花形歌手として活躍し、今日なお健在の田谷力三さん、またゆかりの深い関係者のご協力のもとに「浅草オペラの夕べ」を開催できますことは、他の自治体では見られない大変意義のあることと思います。

本区における芸術文化の振興と豊かなぬくもりのある区民文化創造の一助として、皆さまにご鑑賞いただければ幸いに存じます。

今回、ご協力を頂きました東京芸術大学音楽学部 of 皆さま、特別出演を快くご承諾頂きました田谷力三氏、黛敏郎氏、ポスター、プログラム等デザインをご奉仕頂きました東京芸術大学美術学部の福田繁雄先生はじめ関係者の方々に心からお礼申しあげます。

浅草オペラの夕

第1部 「わが青春の浅草オペラ」

対談 田谷力三+黛敏郎

歌劇 「フラ・ディアボロ」より

“岩にもたれた もの凄しい人は”

オーベル作曲 堀内敬三訳詞

歌劇 「ボッカチオ」より

“恋はやさしい 野辺の花よ”

スッペ作曲 小林愛雄訳詞

独唱 田谷力三

指揮 佐藤功太郎

演奏 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

—休憩—

第2部 「オペラハイライト」

歌劇 「蝶々夫人」第2幕より

G. プッチーニ作曲 河内節子訳詞・演出

キャスト

蝶々夫人 島崎智子

すずき 内田裕子

シャープレス 竹沢嘉明

子供 蒔田尚貴

歌劇 「椿姫」第2幕より 原語上演

G. ヴェルディ作曲 鈴木敬介演出

キャスト

ヴィオレッタ 大音典子

G. ジェルモン 福島明也

アンニーナ 水野恵子

ジュセッペ 河野克典

歌劇 「修禅寺物語」第1場

清水脩作曲 長沼廣光演出

キャスト

頼家 山岸靖

夜叉王 末吉利行

かつら 岩井里香

かえで 石原正子

春彦 河瀬柳史

五 郎 竹 沢 嘉 明
僧 筒 井 修 平

ス タ ッ プ

指 揮 佐藤功太郎 演 出 河内節子・鈴木敬介・長沼廣光
音楽指導 原田茂生・高橋大海 美 術 川口直次
照 明 奥畑康夫 衣 装 渡辺園子
舞台監督 清宮秀高 演出助手 直井研二
コ ー チ 松井和彦 コ ー チ 吉沢美智子
コ ー チ 原島慈子 コ ー チ 古渡裕子
コ ー チ 中野俊也

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
演 奏 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

なつかしの浅草オペラ

芸大が応援、15日に開催

東京・台東区教委の主催による「浅草オペラの夕」が、東京芸大音楽、美術両学部の協力によって、十五日午後六時半から浅草公会堂で催される。

一昨年暮れ、同区教委が「下町の第九交響曲」を主催した時から「次は浅草オペラ復活」が合言葉だった。今回は佐藤功太郎指揮、河内節子、鈴木敬介、長沼広光の演出、東京芸大オーケストラによるオペラ「蝶々夫人」「椿姫」「修善寺物語」の各ハイライトを上演するほか、かつてのスター田谷力三の独唱と、田谷と作曲家黛敏郎との対談によって構成される「わが青春の浅草オペラ」が呼びものになっている。〔原資料縦組〕

〔『朝日新聞』昭和58年7月11日〕

田谷さん、浅草オペラで美声

浅草オペラ全盛時代のスーパースターで、八十四歳のいまも現役のテナ

ー歌手として活躍している田谷力三さんが十五日、ゆかりの浅草で衰えぬ美声を響かせた。

地元台東区が上野の東京芸大オーケストラなどの協力で開催した「浅草オペラの夕」に特別出演。会場の浅草公会堂はオールドファンらで満員。

深紅のドレスシャツを着た田谷さんは、浅草オペラの思い出を語り、大向こうからの掛け声にこたえて「恋はやさし 野辺の花よ……」と熱唱。昔と変わらない歌声に会場からはため息。

「夢みたいにしゅうございました」と田谷さんも興奮気味だった。

〔原資料縦組〕

〔『朝日新聞』昭和58年7月16日〕

懐かし、浅草オペラ

84歳田谷さんの美声 千人、昔に酔う

「恋はやさし……。オールドファンには懐かしい「浅草オペラの夕」が、十五日午後六時半から、東京・台東区の浅草公会堂で開かれ、八十四歳の現役歌手田谷力三さんが、往年をほうふつさせる力強いテナーで、千人の聴衆を魅了した。

浅草オペラは、大正五年から十二年ごろまで全盛をきわめ、田谷さんをはじめ故藤原義江さんらの大スターを生みだした。またわが国ではまだなじみの薄かったオペラを、一挙に大衆化、当時の若者たちをとりこにした。この夜は、その往時をしのぼうと、台東区の呼びかけで開かれたもので、会場は年配の聴衆で埋まった。

まず、田谷さんが作曲家の黛敏郎さんを相手に、「当時の浅草には進取の気風があった。陸海軍の軍楽隊をやめた人たちによるオーケストラだったけど、皆さん一生懸命に聞いてくださった。」と思い出。続いて、エリ飾りのついた赤シャツに、純白のズボンという粋（いき）な格好で、「岩にもたれたものすごい人は」「恋はやさし 野辺の花よ」などの十八番を熱唱すると、伴奏した芸大オーケストラの学生たちからも、さかんにアンコールを求める声が飛んだ。

そのあと、やはり地元の芸大オペラ科の専攻生たちが大先輩に負けじと、「蝶々夫人」「椿姫」などのさわりを上演、聴衆は三時間にわたり、良き時代の思い出にひたった。

〔原資料縦組〕

(『讀賣新聞』昭和58年7月16日)

昭和58年10月13日 ガムラン演奏会

芸大ガムラン演奏会

小泉文夫先生を偲んで

ジャワの音楽と舞踊と影絵芝居

1983年10月13日(木) 午後6時半開演 浅草公会堂

主催：東京芸術大学音楽学部

小泉文夫教授を悼む

ガムラン音楽研究指導の第一人者であった小泉文夫教授は、今回の演奏会をまたず、八月二十日の朝永眠されました。教授は東京芸術大学の音楽学講座で、二十余年の長きに亘り、民族音楽学の研究と教育に情熱を傾けてこられました。この演奏会も、そうした教授の努力の結果、世に示すことのできた、わが国での東洋民族音楽の一つの美しい開花と言えましょう。

皆様と共に、このガムラン演奏会の今後のいっそうの発展と、小泉教授の永遠の眠りの安らかならんことを、心から祈りたいと思います。

昭和五十八年秋

東京芸術大学長 山 本 正 男

ごあいさつ

〔前略〕

様々な困難にもかかわらず、芸大で開講され[た]ガムランの授業が満足のべき成果をあげたこと、すなわち私が日本に來たことが無駄に終わらな

かったことを、心からうれしく思っています。

私自身の、そしてガムランの活動の中で、私が最も尊敬し決して忘れることのできない方が、偉大なる音楽家・故小泉文夫教授です。彼こそが、ジャワから日本にガムランを運び、彼こそが、ガムランと全世界の音楽を愛し、彼こそが、ガムランとあらゆる楽器を演奏することができた人でした。民族音楽学の分野における彼の業績に対して、深く深く尊敬の意を表します。そして今夜の演奏会は、故小泉文夫教授の冥福を祈る為にこそふさわしいと思っています。

今回の演奏会の為にご協力くださった全ての方々に、芸大ガムラン演奏会の責任者として深く感謝いたしますとともに、ご来場の皆様方には、その暖かいご理解に心からお礼を申し上げてあいさつとさせていただきます。

東京芸術大学客員外国人教師 サ プ ト ノ

演 目

1. 《表敬曲》 ババル・ラヤル (ペログ・リモ)
2. 《舞踊》 ゴレ・スリカユングユン
(伴奏曲) ランドウ・クンテル〜アユンアユン (ペログ・ヌム)
3. 《追悼曲》 ガドン・ムラティ〜アスモロドノ・フミオ・コイズミ
(スレンドロ・ソング)
4. 《舞踊》 グヌング・サリ
(伴奏曲) グヌング・サリ (ペログ・ヌム)
〜休 憩〜
5. 《遊奏曲》 ミジェル・ウィガリンティアス〜ドラナンードラナン
6. 《影絵芝居》 ーラマヤナ物語抄ー
a. マングリアワン国の場

(伴奏曲) カボル〜クラウィタン, アヤアヤアンほか

b. アルゴ・ソコ宮殿の場

(伴奏曲) パンコル・ドゥドカスマラン, アヤアヤアン
ほか

c. アルンコ国の場

(伴奏曲) ベンドロン, スルプガン, サンパほか

7. 《終曲》 ワリボルナ (ペログ・バラング)



(左) 小泉文夫, 昭和57年
1月12日ガムラン特別演奏
会より

(右) サプトノ, 昭和54~
59年, インドネシア中部ジ
ャワ州より来日し, 本学楽
理科の客員外国人教師とし
てガムランの指導にあたる

* 小泉先生とガムラン

* 演目解説

* ワヤン・クレツについて

* ジャワ舞踊の魅力

* 楽器の紹介

* 楽器奏法

* 詩と音楽

皆川厚一

田村 史

田村 史

ガムラン演奏メンバー

サプトノ	加藤 恵	藤井佐斗子
—————	佐々木真理子	星野 寛
皆川 厚一	佐藤 里美	町田さゆり
坂尾 康子	野本由起夫	柳原 リン
	橋本佳代子	米山まどか
白井真由美	福沢 達郎	
	松野久美子	木村 佳代
鴻巣 香	渡辺 潤子	佐藤まり子
牧野 宏美		田村 史
	青嶋 由紀	田村真理子
	有田 栄	中村 圭子
植村 幸生	稲葉 清美	野田 宏人
岡本 悦子	遠藤 和宏	山田 敦子
風間 純子	太田 典子	—————
福岡 正太	小川あづさ	中村 裕二
吉田美奈子	後藤 明子	望月 修
	竹下 晴子	森重真由美
井上 恵理	中村 仁美	
小原 伸一	中村 美郁	

舞台進行

木村 直子
森重 行敏
星野 起美

協力

小川 和香
大倉 文雄
林 美穂子
矢向 正人
大角 欣矢
久万田 晋
田村千恵子

ガムラングループ

「ランバンサリ」

民族音楽ゼミナール

東京音楽大学

ガムラン研究会

草野 妙子

昭和59年7月14日 第2回浅草オペラの夕

第2回浅草オペラの夕

1984年7月14日(土)

開場=5:30PM 開演=6:00PM

台東区立浅草公会堂ホール

主催=台東区教育委員会

協力=東京芸術大学

* ごあいさつ

台東区長 内 山 榮 一
台東区議会議長 吉 住 弘
東京芸術大学音楽学部長 渡 邊 高之助
台東区教育委員会

G. プッチーニ作曲

“蝶々夫人”全二幕(原語上演)

指揮 佐藤功太郎

演出 長沼 廣光

装 置	川口 直次	照 明	奥畑 康夫
衣 裳	渡辺 園子	振 付	藤間貴与志
舞 台 監 督	直井 研二	演 出 助 手	清宮 秀高
演 出 助 手	国松真知子	舞 台 監 督 助 手	賀川 裕之
副 指 揮	江上 孝則	副 指 揮	現田 茂夫
稽古ピアニスト	森島 英子	稽古ピアニスト	橋本 梢
音 楽 指 導	伊藤 亘行	音 楽 指 導	原田 茂生
音 楽 指 導	高橋 大海	音 楽 指 導	中野 俊也

大 道 具 株式会社 NHK美術センター

照 明 操 作 株式会社 アート・ステージライティング・
グループ (ASG)

衣 裳 東京衣裳株式会社

小 道 具 藤波小道具株式会社

か つ ら 株式会社 丸善かつら

メイクアップ 劇団俳優座劇団員(遠藤 剛, 川上夏代,
青山眉子, 松本潤子)

出 演

東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生

合 唱

東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻有志

東京芸術大学音楽学部声楽科3年有志

台東区民合唱団

オーケストラ

東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キ ャ ス ト

蝶々夫人	東 敦子	伯 母	平形美知子	舞 妓	西野 薫
ピンクートン	饗場 知昭	従 姉	田中まり子	〃	藤本いく代
シャープレス	多田羅迪夫	親戚の男	小島 海治	〃	百合草道子
ス ズ キ	水野 恵子	〃	吉田 伸昭	〃	丸山 晴代
ゴ ロ ー	山岸 靖	〃	大沢 一彰	〃	稗方 摂子
ボ ン ゾ	佐藤征一郎	役 人	大庭 陽一	芸 者	丹下かなめ
神 官	河野 克典	〃	佐野 正幸	〃	岩本 喜子
ヤマドリ	浦野 実成	禿(かむろ)	高橋奈津子	〃	佐藤 真子
ケ ー ト	板本みどり	〃	高橋 裕子	コック	賀川 裕之
子 供	田中久美子	舞 妓	新 久美	下 男	佐野 正一
ヤクシデ	林 剛一	〃	高橋 敦子		
母 親	後藤千恵子	〃	郡司 律子		

* ごあいさつ

東 敦子

昭和60年6月20日 吹奏楽の夕べ(第11回台東区民コンサート)

吹奏楽の夕べ

芸大学生吹奏楽発表演奏会/第11回台東区民コンサート

1985年6月20日(木)

台東区立浅草公会堂

6:30 開演

主催●東京芸術大学音楽学部

台東区教育委員会

プログラム

1. 戸外の序曲……………A. コープランド
An Outdoor Overture……………A. Copland
2. アルメニアダンス パート I ……………A. リード
Armenian Dance Part I……………A. Reed
3. ディヴェルティメント……………L. バーンスタイン
Divertiment ……………L. Bernstein
4. 吹奏楽のための交響曲……………P. ヒンデミット
Symphony in B^b for Band……………P. Hindemith
5. ディズニーメドレー……………岩井直博
Disney Medley……………N. Iwai

指揮: 大野和士
conductor Kazushi Ohno

演奏 東京芸術大学音楽学部 管・打楽器専攻学生
Tokyo Geijutsu Daigaku Wind Ensemble

*ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部長 渡邊高之助
台東区教育委員会

昭和60年7月20日 第3回浅草オペラの夕べ

第3回浅草オペラの夕べ

1985年7月20日(土)

開場=6:00PM 開演=6:30PM

台東区立浅草公会堂ホール

主催=台東区教育委員会

協力=東京芸術大学

清水脩作曲

“修禅寺物語” 全一幕三場

指揮 松井和彦 演出・殺陣 長沼廣光
装 置 川口直次 照 明 沢田裕二
衣 裳 渡辺園子 舞 台 監 督 清宮秀高
演 出 助 手 直井研二 演 出 助 手 国松真知子
舞 台 監 督 助 手 賀川裕之 稽古ピアニスト 森島英子
稽古ピアニスト 田中 梢
大 道 具 株式会社NHK美術センター
照 明 操 作 有限会社ゼネラルスタッフ
衣 裳 東京衣裳株式会社
小 道 具 株式会社藤波アート・センター
か つ ら 株式会社丸善
メイクアップ 劇団俳優座劇団員(遠藤 剛, 阿部百合子)
半 鐘 提 供 株式会社宮本卯之助商店

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生

オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キャスト

源 左 金 吾 頼 家	中 村 健	金窪兵衛行親	多田羅 迪夫
面 作 師 夜 叉 王	高 橋 大 海	修 禅 寺 の 僧	竹 沢 嘉 明
夜 叉 王 の 娘 か つ ら	上 地 恵 美 子	行 親 の 家 来 一	稲 垣 俊 也
夜 叉 王 の 娘 か え で	大 音 典 子	行 親 の 家 来 二	牛 山 治
か え で の 婿 春 彦	河 瀬 柳 史	行 親 の 家 来 三	小 迫 良 成
下 田 五 郎 景 安	土 師 雅 人	行 親 の 家 来 四	吉 村 純

昭和61年6月23日 室内楽の夕べ(第13回台東区民コンサート)

室内楽の夕べ

芸大学生室内楽演奏会/第13回台東区民コンサート

1986年6月23日(月)
18:30開場 19:00開演

台東区立浅草公会堂

主催●東京芸術大学音楽学部
台東区教育委員会

プログラム

弦楽四重奏曲 ニ短調 作品76の2 “五度” ハイドン
String Quartet D Minor Op. 76-2 “Fifths”……J. Haydn

1st Violin: 秋葉美果(3年) Viola: 渡辺安見子(3年)
2nd Violin: 酒井智子(3年) Violoncello: 三森未来子(3年)

木管五重奏のための6つのバガテル リゲティ
6 Bagatelles for Wood-wind Quintet……G. Ligeti

Flute: 山田みづほ(3年) Horn: 松浦光男(3年)
Oboe: 鈴木純子(3年) Bassoon: 桔川由美(3年)
Clarinet: 河端秀樹(3年)

——休憩——

弦楽四重奏曲 第14番 ニ短調 “死と乙女” 遺作 シューベルト
String Quartet No. 14 D Minor

“Death and the Maiden” Op. posth. ………F. Schubert

1st Violin: 高岡真樹(4年) Viola: 新田綾子(3年)
2nd Violin: 日向愛子(4年) Violoncello: 植草ひろみ(4年)

昭和61年7月31日 第4回浅草オペラの夕べ

第4回浅草オペラの夕べ

1986年7月31日(木)

台東区立浅草公会堂

開場=6:00PM 開演=6:30PM

主催=台東区教育委員会

協力=財団法人二期会オペラ振興会

東京芸術大学

*ごあいさつ

台東区長 内山 榮一

東京芸術大学音楽学部長 服部 幸三

台東区教育委員会

ヨハン・シュトラウス作曲

オペレッタ “こうもり” 二幕

訳詞: 中山 悌一 台詞: 栗山 昌良

指揮: 大町陽一郎/演出: 栗山 昌良

スタッフ

振付 牧 阿佐美 舞台監督 小栗 哲家
装置 若林 茂熙 演出助手 小須田 紀子
衣裳 岸井 克己 装置助手 井村 さつき
照明 勝 柴 次 朗

キャスト

アイゼンシュタイン(裕福な男) 中村 健
ロザリンデ(その妻) 佐藤しのぶ
アデーレ (アイゼンシュタイン家のお手伝い) 西野 薫
ファルケ(アイゼンシュタインの友人) 平野 忠彦
アルフレード(ロザリンデの昔の恋人) 伊達 英二
オルロフスキー侯(ロシアの大貴族) 荒 道子
フランク(刑務所の看守長) 佐藤 征一郎
プリント(弁護士) 斎藤 俊夫
イダ(ファルケの恋人) 佐藤 今有子
フロッシュ(看守) 斎藤 忠生

ゲスト歌手（“春の声” 独唱） 加納 香子
 出演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
 二期会オペラ振興会
 合唱 二期会合唱団
 台東区民合唱団
 バレエ 牧阿佐美バレエ団
 オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

昭和62年10月13日，14日 開館記念 奏楽堂オペラの夕べ

開館記念 奏楽堂オペラの夕べ

1987年10月13日(火)・14日(水)

開場＝午後6時 開演＝午後6時30分

旧東京音楽学校奏楽堂

主催＝台東区教育委員会／助 台東区芸術・歴史協会

協力＝東京芸術大学

ごあいさつ

台東区長 内 山 榮 一

1987年芸術の秋

奏楽堂が 上野の森に

再び華麗な姿を 現わした

偉大な音楽家を生み出し

歴史と伝統を育んだ

価値ある音楽の宝庫

汲めども尽きぬ 英知を集め

人々の壮大なハーモニーを集め

今ここに飛び立つ

奏楽堂よ 永遠であれ

台東区議会議長 服 部 征 夫

今から97年前に誕生した旧東京音楽学校の奏楽堂が，ここにめでたく移築されました。修復された我が国最初のパイプオルガンの響きとともに，音楽の歴史を刻む名建築として上野の森に永遠に残されることになりました。

東京芸術大学は，わが台東区にあってもこれまで遠い存在でしたが，この奏楽堂の保存を契機として身近かな大学になり，台東区の文化行政の推進にそのノウハウをご教示願えるという幸せも区民の手にすることができました。

今晚は，この奏楽堂の開館を記念したオペラの夕べです。最後までごゆっくりお楽しみいただければ幸いです。

* 東京芸術大学音楽学部長 服 部 幸 三

* 台東区教育委員会
 * 財団法人 台東区芸術・歴史協会

CH.W. グルック作曲

歌劇 オルフェオとエウリディーチェ

訳詞：中山悌一 補訳：三林輝夫

〔本学の創立100周年記念事業の一環として，「オルフェオとエウリディーチェ」の公演が，10月9日から12日までの4日間，上野公園の一角に移築された旧東京音楽学校奏楽堂で行われた。この「開館記念 奏楽堂オペラの夕べ」は，上記の連続演奏会と同じ出演者により行われている。出演者については第5章参照。〕

昭和63年2月17日 ガムラン・雅楽の夕べ（第15回台東区民コンサート）

（ガムラン・雅楽の夕べ）

東京芸術大学音楽学部学生演奏会／第15回台東区民コンサート

日 時：昭和63年2月17日（水）

開場18:00 開演18:30

場 所: 旧東京音楽学校奏楽堂

主催: 東京芸術大学音楽学部・台東区教育委員会・

台東区芸術・歴史協会

*ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部長 服 部 幸 三

台東区教育委員会
台東区芸術・歴史協会

プログラム

●ガムラン

1. 儀典曲 *Roning Tawang* ロネン・タワン
2. 古 曲 *Sinom Parijata* シノム・パリジョト
3. 舞 踊 *Golek Sri Kayungyun* グレ・スリカユンユン
4. 終 曲 *Walipurna* ワリポルナ

—休 憩—

●雅 楽

1. 管 絃 平調調子(ひょうじょうのちょうし)
五常楽急(ごしょうらくのきゅう)
越天楽残楽三返(えてんらくのこりがくさんべん)
陪臚(ばいろ)
2. 舞 楽 蘭陵王(らんりょうおう)

ガムラン出演者

●出演

〈学部生〉 饗庭 裕子 小岩 信治 小島 夕季 白石 由香
鈴木 学 富田 信治 友野 晶夫 畠山 美佳子

馬場 大輔 前原 恵美 増野 亜子 山口 恭子
横山 真一郎 若松 里江子
大久保 篤 梶浦 靖子 勝裕 あゆみ 小林 恵理子
斉藤 恒芳 長 葉子 名取 太郎 松下 登志恵
山本 華子 山本 陽子
土井 康司 藤田 育子 村岡 朋子 吉田 多満子
浅野 美生 住吉 紀子 中田 一子

〈大学院生〉中村 仁美 中村 美郁

富田 晃 馬場 信子 矢野 加奈子

〈賛助〉大島 俊作 塩見 利恵 高世 夏美

●指導 田村 史

●協力 芸大ガムランクラブOB会 音工場 HANEDA

雅楽出演者

●出演

〈笙〉 園 恭子 高原 聰子 山内 佳子 山本 華子
吉原 みな子 清野 陽子 伊藤 江理 平井 裕子
・木田 敦子 ・小山 美穂

〈箏 箏〉 増野 亜子 小林 恵理子 野口 智子 若桑 比織
長沼 雅子 ・中村 仁美 ・白木 啓之 田淵勝彦(賛助)

〈龍 笛〉 山口 恭子 小島 夕季 梶浦 靖子 山本 陽子
中岡 彩紀 川島 央子 大井 義久 笹本 武志
平井 裕子 ・中村 美郁 ・ゲーリー・ ・ヒュー・デ・
ワトソン フェランティ

〈鞆 鼓〉 近藤 文子 寺内直子(賛助)

〈太 鼓〉 大久保 篤 愛澤 伯友

〈鉦 鼓〉 ・パトリック・ハリウエル

〈箏 〉 寺内直子(賛助) ・小山 美穂 ・木田 敦子

〈琵琶〉 愛澤 伯友 ・ヒュー・デ・ フェランティ 田淵勝彦(賛助)

〈舞 人〉 ・広田 晶子

●指導 芝 祐靖 宮田 まゆみ 田淵勝彦 (・大学院生)